



戦争が絶え間ない中世時代にあつて、このオランダだけは商工業がすごく盛んで、戦国時代に堺商人がすごく元気があったこととちょっと似てると思います。

ヨーロッパ（いち）金を叩き出す領地を、フェリペ2世は親からの遺産として受け継いだんですね。自分が苦労して獲得した土地じゃないんです。ただただ自分が息子だということで、親の相続財産でスゴイものがドカドカとやって来た。

つい、調子に乗ったんですねえ。金に困ってないわけでしょ。にもかかわらず、金を叩き出すネーデルラント地方に対して、より重い税金を負わせるために「税率アップ！」「えー！なんでやねん?!」そればかりかネーデルラントの人々に、「ここは私の領地だ。領主・国王である私はバリバリのローマ・カトリック教徒であるから、おまえたちは全員カトリックに改宗しろ！」と強制改宗を命令したんです。

フェリペ2世は信仰心が篤いというか、その信仰心の篤さは、プロテスタントの人たちを積極的に弾圧するという形にも現れたんですね。周りの人たちからすると大変迷惑なことでした。

それで、強制改宗になった時、「ええ加減にせえよ！税金だけでも腹立つのに、そんな内面のことまでナニ言つとんねん！」と怒るわけですね。というのは、ネーデルラントの人たちはプロテスタントが多かったんです。

ネーデルラント地方はまだ国じゃなくて17の州でした。そのうち南部10州はカトリックが多く、北部7州はプロテスタントが多かった。それで、重税を課せられるとなった時、「独立戦争じゃ！いてまえ！」となるんですが、南部10州は独立戦争から脱落するんです。

この南部10州が現ベルギーで、北部7州が現オランダなんですね。

さて、北部7州はスペインに対抗するためにユトレヒト同盟を作ります。先ほど申し上げたように、ネーデルラントという国にはなくなって、それぞれの州があるので、その州の団結を眺めながら「裏切れへんよな。大丈夫やな。一緒に戦うよな」ということで、互いの団結を確認しながらスペインと戦った。これをユトレヒト同盟と言いますが、この同盟の旗振り役・中心メンバーがホラント州でした。

オランダの船が初めて日本に来たのは1600年ですが、日本に漂着したんです。

その時対応した日本の役人が質問しました。「服装とか何とか見ていると、おまえたちはどうもスペイン人とかポルトガル人じゃないように思う。彼らとはちと違うと思う。おまえらはどっから来たんや？」「はい、ホラントです。」その時にはネーデルラントという国があったのですが、国の名前じゃなくて、出身地のホラント州の名前を答えたんですね。それを国の名前だと勘違いした役人が、やがてホラントがなまってオランダになったんです。

私がアメリカに行った時、「どこから来たんですか？中国ですか？韓国ですか？日本ですか？」

「日本です」と言うのがいいですよ。「大阪です」と答えたようなもんですよ。国ではなく地方自治体、大阪府という1つの府の名前を言うて、それを国と勝手に勘違いされたみたいな感じですよ。

とにかく、“オランダ”というのは日本だけで通じる名称だと思います。世界的にはネーデルラント。

海外に行って「オランダ」「オランダ」言うても通じません。

それはともかくとして、一応オランダということにしときます。ここ日本やからね。

さて、戦争によって宗教の押し付けをはねつけた！自由独立を勝ち取った！というオランダは、ヨーロッパの中で特異な存在になりました。

そして、自由を求める人たち、特にプロテスタントの人たちがオランダ目がけてウワツとやって来たんですが、同時に、ユダヤ人たちにとってもオランダは憧れの地になります。

スペイン・ポルトガルから追放されたユダヤ人たちは、オランダに移住することが 1 つの大きな目標になっていくんです。なぜなら、オランダには異端審問所がなかったから。ヨーロッパ中くまなくあるのに。昔はオランダにもあったのですが、独立して異端審問所を廃止したんですね。

だから、オランダに行くと、自分の内面の信仰についてとやかく言われることはない。火あぶりにされることはない。いわば迫害されて来た人たちが集まる国ということで、同じように迫害されて来たユダヤ人にとっても「ここは居心地が良い国に違いない！」  
それで、スペイン・ポルトガルから船に乗って続々とオランダに移住するユダヤ人たちが後を絶たなかったんです。

なぜ船なのか？ イベリア半島とオランダの間にフランスがあるじゃないですか。フランスもカトリックの国でユダヤ人迫害が酷かったんですね。陸路だと命危なかったんです。  
だから、船に乗ってオランダの色んな港に渡り、あっという間にオランダのユダヤ人人口が増えたんです。

スペインから来たユダヤ人をセファルディと言います。セファルディはスペインという意味なんですね。セファルディ・ユダヤ人たちの流入によって、オランダの経済力が、今までにも増してすごい発展を遂げることになったんです。特に、アムステルダムはヨーロッパの中心的な貿易都市に発展します。

そうになったのはユダヤ人たちの貢献が大きいですね。何しろ彼らは数か国語に通じてますし、イタリア・北アフリカ・アラブ・トルコ・ペルシア・インドに至るまで、ユダヤ人コロニー/共同体が世界中にある。世界中に散らされたそれぞれの所でビジネスをやっているんで、世界中のそれらの拠点を国際的に結ぶことで、国際的コネクションとして貿易で活用することができたんですね。非常に有利なことでした。  
更に、イタリアにもコロニーをたくさん持っていました。ゼヌア・ベニス・ナポリ・リボルノという重要な港湾都市に通商ルートを築いていたのです。

スペインでは「マラノー、マラノー」と冷遇されていたユダヤ人たちは、アムステルダム/オランダに来ることによって、水を得た魚のように大活躍します。アムステルダムは、ユダヤ人の間でニュー エルサレムという別名が付けられるようになりました。ニュー エルサレム。すなわち新しいエルサレム。

アジア貿易に当たるオランダの東インド会社…。ちょっとずれますが、東インド会社はアジアのことです。コロンブスがアメリカ大陸を発見した時、インドやと思ったんですよ。完全な勘違い。  
アメリカ大陸がインドになってしまったので、本当のインドやアジアを東インドと名付けたんです。アメリカのことは西インドです。だからオランダ東インド会社は、オランダがアジア貿易をするための会社だと考えていただいてもいいと思います。オランダ東インド会社の株式の 1/4 以上はユダヤ人が握ってました。

この東インド会社が、やがてアメリカの西海岸でニュー アムステルダムという町の開発をします。これが後に名前を変えてニューヨークになったんですねえ。

アジア貿易でも非常に中心となったセファルディ・ユダヤ人たちはオランダで大活躍をしました。それを聞きつけた東ヨーロッパのユダヤ人たち、彼らをアシュケナジー（ヘブライ語でドイツという意味がある）と言いますが、ドイツよりも東に住んでいるユダヤ人たちは、「あそこ行ったら過ごしやすいんじゃないの？」 かつてのポーランドは王様がユダヤ人を優遇して招いたのですが、この頃になると、ポーランドでもユダヤ人大虐殺が始まったんです。それで、オランダに行ったら良い生活ができるんじゃないかということで、東からもユダヤ人がズワツと流れて来るんですね。

その結果オランダは、セファルディ・ユダヤ人とアシュケナジー・ユダヤ人の両方がわんさか溢れるような国になりました。

そして、その両者が集結するようになった 17 世紀のオランダは、世界で最もリッチな国として繁栄するんですね。オランダは国土も人口もちっさいんです。にもかかわらず 17 世紀、押しも押されぬ大国として世界的にも大きな発言権を持ち、何よりもお金持ちの国になったんですね。

なぜちっさいにもかかわらず、人口少ないにもかかわらず、そんな大繁栄を得ることができたんでしょう？不思議ですねえ。いや不思議ではない、とも言える。ユダヤ人を優遇したからです。

聖書にこう書いてあります。神はユダヤ人の先祖アブラハムに告げられました。

**「わたしは、あなたを祝福する者を祝福し、あなたを呪う者をのろう。地のすべての部族は、あなたによって祝福される。」**（創世記 12 章 3 節）

目に見えない創造主がいるということは、何によって知ることができるでしょう？

目に見えるユダヤ人の歴史を通して、神のことばが実際に実現しているかどうかを通して、創造主の存在を確認することができるのです。

ユダヤ人の歴史を辿ることによって、聖書のことばが時代を越えて真実であり続けているのだ、ということ私たちは確認することができるのですね。

このユダヤ入門シリーズは現代のイスラエル建国まで続きます。長い旅になりそうですねえ。

でも、今の中東問題を考えて行くためにも、今の情報だけじゃなく、それまでの経緯（いきさつ）を知っておくことがとても大事なのではないかなと考えていますので、これを続けていきたいと思います。

よろしければまた、このチャンネルをご覧頂いたらなと思います。

またこのチャンネルでお目にかかりましょう。それまで皆さん、お元気でいらしてください。さよなら！

\*使用した聖書は『聖書 新改訳 2017』です。